



はらいせき ときかんぼぐん
原遺跡の土器棺墓群（上）と土器棺（下）



はらいせき
原遺跡で見つかった、当時のごみすて場

原遺跡では、弥生時代中頃のごみすて場が見つかっています。そこからは、たくさんの壊れた土器や石器などが見つかっています。中には土器や石器をつくる途中で失敗してしまったと思われるものなどもありました。この南側の区域には当時のお墓がまとまって見つかり、弥生時代の人々も生活する場所・ごみを捨てる場所・お墓をつくる場所などを、きちんと区別していたのでしょう。

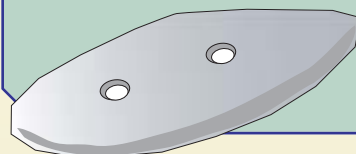


弥生時代のお墓【土器棺墓】

これまでの市内の発掘調査では、土器棺墓と土壌墓が見つかっています。土器棺墓は、平成9年度に行なった原遺跡の調査で15基がまとまって見つかり、これらは、小児などの遺体や骨を大型の甕や壺に入れ、蓋・甕・鉢型土器などをかぶせて蓋をして、地中に埋めたお墓と考えられています。

土壌墓は、十三塚遺跡・泉遺跡などの調査で多く見つかり、地面に穴を掘り、遺体を直接入れて埋葬したお墓です。中からは副葬品として一緒に埋められた、管玉・勾玉・土器・石包丁などが見つかったお墓もあります。

特に原遺跡の様に、土器棺墓がまとまって発見された例は県内でも少なく、弥生時代の墓制を考える上で貴重な資料と言えるでしょう。



出土した土器（蓋）



出土した土器（壺）



出土した石製品

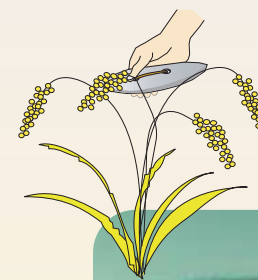
弥生人の住んだ竪穴住居

弥生時代の竪穴住居跡は、今熊野遺跡・十三塚遺跡・泉遺跡などで発見されています。これらの住居跡は、当時の住まいの構造を考える上で貴重な資料となっています。また、住居の中からは弥生土器などの生活道具も出土しています。



米づくりと共に伝わった九州地方の土器

東北地方の弥生時代の始まりは、西日本より若干遅れて始まります。北九州地方における弥生時代前期の土器を総称して「遠賀川式土器」と呼ばれていますが、その系統を引く土器が、十三塚遺跡で発見されています。この土器と一緒に米づくりの技術も当地に伝えられたことを物語っています。原遺跡からは、稲穂をつみ取る道具である石包丁や、鎌のように使われた板状石器などの稲作の道具も見つかりました。



原遺跡から出土した石包丁（左）と板状石器（右）